

2025 年度 傾斜的研究費（全学分）国際研究環支援 研究報告書

【研究費区分】：国際研究環支援

【研究代表者所属】：健康福祉学部 理学療法学科

【研究代表者氏名】：酒井 克也

【研究代表者氏名フリガナ】：サカイ カツヤ

【研究代表者職】：助教

【研究分担者（所属,氏名,職）】

- ・湘南医療大学, 宮内貴之, 助教
- ・東京都立大学, 池田由美, 教授
- ・東京都立大学, 宮本礼子, 准教授

【HP（*本研究の HP を作成している場合は、その URL を記入してください。）】

- ・ <https://physiotherapy.hs.tmu.ac.jp/2025/09/08/copy-3/>

【活動概要と、ここで形成された研究グループ・研究拠点の今後の研究活動について】（800～1000 字程度で記入。図（組織図含）、グラフ等の使用も可。）

・活動概要

本研究は University of Oxford の Demeyere 教授が開発した認知機能の構成要素別評価である Oxford Cognitive Screening(OCS)の日本版を開発し(図 1), 急性期脳卒中患者の認知機能の障害パターンを明らかにするとともに、障害パターンに応じて運動機能に差があるかを明らかにすることを目的とした。2025 年 4 月から 2026 年 3 月にかけて、2 施設にて臨床試験を実施し、途中経過の報告と国際シンポジウムを開催するために 9 月に Demeyere 教授を荒川キャンパスに招聘した。

臨床試験は、急性期脳卒中患者 63 名を対象に、横断研究デザインにて実施した。評価は認知評価として OCS, 運動機能評価として上肢 Fugl-meyer Assessment (FMA)を測定した。分析方法は、OCS の下位項目である 13 項目を用いて Archetypal Analysis を実施した。アーキタイプに分類後、各群における FMA(合計点, 上肢の近位, 遠位, 手指の 4 つの部位)の差を Kruskal-Wallis test を用いて比較し、多重比較した ($P > 0.05$)。分析の結果、対象者の認知機能の障害パターンは 6 つのタイプに分類された (図 2 カラーバーが青に近づくほど障害が重度)。具体的には、注意障害が顕著な「注意障害タイプ (Arch 1)」, 注意と読解障害が目立つ「注意・言語障害タイプ (Arch 2)」, 意味理解・計算・見当識・遂行の障害が目立つ「数字・記憶・遂行機能障害タイプ (Arch 3)」, 命名・読解の障害が目立つ「言語障害タイプ (Arch 4)」, 記憶障害が目立つ「記憶障害タイプ (Arch 5)」, そして全般的に軽度な低下に留まる「軽度・境界域タイプ (Arch 6)」であった。各 Arch における FMA の差を比較した結果、FMA の合計点に群間差はなかった($P = 0.990$)。しかし、上肢の近位機能(肩関節に近い関節運動能力)の比較では、注意障害タイプ (Arch 1) は軽度・境界域タイプ (Arch 6) と比較して有意に低値を示した ($P = 0.007$)。さらに、手の機能において、注意障害タイプ (Arch 1) , 言語障害タイプ (Arch 4) , 数字・記憶・遂行機能障害タイプ (Arch 3) の順で運動機能が低値を示した (Arch 1 vs 4; $P = 0.003$, Arch 4 vs 3; $P = 0.040$)。これらの結果は仮説通り、認知機能の障害パターンに応じて運動機能が異なることを示した。

国際シンポジウムは、「Cognitive assessment for stroke patients」というテーマで開催し、神経心理士の視点から Demeyere 教授に、理学療法士の視点からは本研究代表者の酒井が、作業療法士の視点からは湘南医療大学の宮内先生に講演いただき、脳卒中患者の認知評価をどのような評価を用いてどのように実施していくべきか講演し、ディスカッションした。

OCS Oxford Cognitive Screen



図1. OCS 認知プロフィール

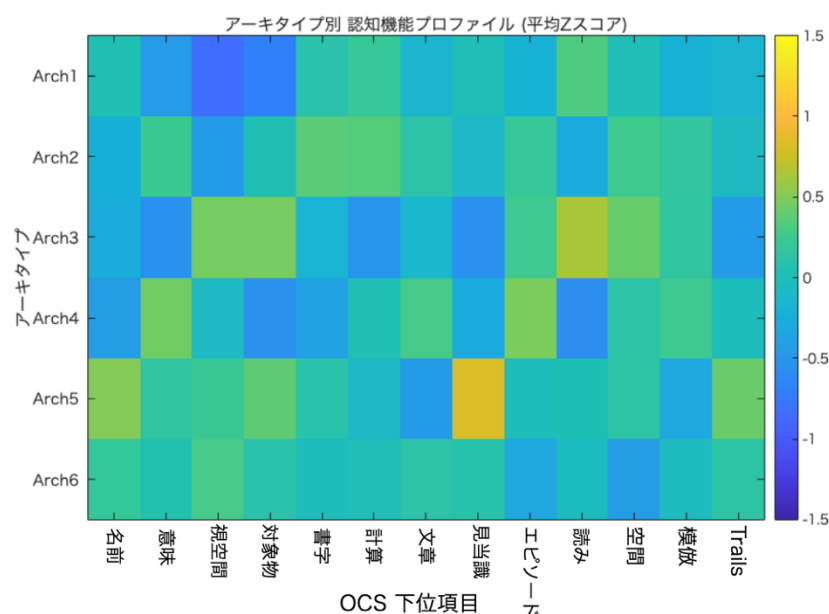


図2. 認知障害パターン

・研究グループ

現在, Demeyere 教授, post doctor の Sam Webb, University of Queensland の Margaret Jane Moore と研究チームを結成し, 2つの研究がスタートした。1つ目は OCS のアプリバージョンである OCS-Plus の開発である。本研究に関する研究助成を日本理学療法学会連合 2025 年度理学療法にかかわる研究助成に応募した結果, 採択された。もう一つは, 本研究結果から得られた知見から発想を得た脳卒中後認知機能障害の障害パターンの同定とテーラーメイドリハビリテーション手法の開発を進める予定である。

【学会発表 (発表題目, 発表大会名, 年月を記入)】

- ・「日本語版 Oxford Cognitive Screening を用いた認知障害の検出率とその特性」第 50 回日本高次脳機能障害学会, 2026 年 11 月。
- ・「A reliability and validity study of the Japanese version of the oxford cognitive screening」第 24 回日本神経理学療法学会学術大会, 2026 年 9 月。

【論文発表又は著書発行 (発表題目, 著者, 発表誌又は出版社, 年月を記入)】

著書

- ・高次脳機能障害の評価と戦略的アプローチ, 医学書院, 2026 年発刊予定。

【学会会議開催実績報告】

- ・1st International symposium on Neuropsychological Rehabilitation

【海外研究者の招聘実績】

- ・1st International symposium on Neuropsychological Rehabilitation
University of Oxford, Department of Neurosciences, Prof. Nele Demeyere

【外部資金への応募状況】

- ・創発的研究支援事業
- ・日本理学療法学会連合 2025 年度理学療法にかかわる研究助成
- ・日本高次脳機能障害学会 2027 年度学術研究助成制度

【科学研究費助成事業や国等の提案公募型研究費, 企業からの受託研究費・共同研究費の獲得状況】

- ・日本理学療法学会連合 2025 年度理学療法にかかわる研究助成 採択

【受賞等】

【その他社会貢献】

[公的審議会・委員会等の公的貢献，生涯学習支援・普及啓発，国際貢献・国際交流等]

-

【研究成果による特許等の産業財産権の出願・取得状況】

(産業財産権の種類，名称，出願番号，出願年月日)

-

【研究分担額】

(研究代表者・分担者名,所属,金額 (円))

-